

第一節 ファウルス

一瞬ごとに炸裂する火球が閃きながら数を増す。全天を覆い尽くすかのような光の壁は、艦載機の薄い外壁を隔てているにもかかわらず、ほとんど物理的なまでの圧力をはらんで、見る者の喉元を締め上げる。連邦暦五七二年九月七日、共和国暦七二年一月一〇日、約八万隻の戦闘艦艇が参加した史上最大の会戦、“ミットリツフェル宙域会戦”は最終ステージを迎えていた。

……この戦いは負けだ。

呟きは、しかし、声にはならない。確かにあと一歩だった。あと一歩で、連邦空軍は共和国宇宙軍の“常勝提督”クローネス・マールク元帥の旗艦を撃沈し、勝利の凱歌の裡にこの会戦の最終楽章を演奏し終えることができたはずだった。

が、予測よりもほんのわずか早くミットケル機動艦隊……ネイス・ミットケル中将隷下の共和国宇宙軍艦隊主力……が戦場に到着したとき、連邦空軍艦隊は一気に混乱の坩堝の中に投げ込まれた。まず、ヘルムート・ナイク中将の第五艦隊が、旗艦『アブソリユート』以下過半を撃沈破されて壊滅した。続いて、連邦空軍第九艦隊が怒り狂った共和国艦隊の猛攻をまともに受けとめる羽目に陥った。共和国艦隊のファートウリック・ラング艦隊とセルティ・マックス艦隊が、連邦空軍第九艦隊の防禦ラインを左右両翼から同時に襲いかかった。数力所にわたって突破口が切り開かれると同時に、マールク元帥の直屬艦隊が火力の面となって並行前進し、第九艦隊の防禦を一気に覆す。泡立つような火球の群が、まるで草原を焼き尽くす大火のように連邦空軍艦隊を覆い尽くした。態勢を立て直す暇もなく、第九艦隊司令官アレ

ンタ中将の旗艦『シャドーラ』も鋼鉄とエネルギーの濁流に巻き込まれ、巨大な火球となって爆散し去った。

アレクタ艦隊の艦列を突破した共和国宇宙軍艦隊は更に回り込んで第三艦隊の側面を叩き、連邦空軍艦隊の中枢部へ突入しようとする、これを阻止しようとした連邦空軍第三、第一〇艦隊と凄まじいばかりの短距離砲撃戦を繰り広げた。

第二艦隊の航母艦『デラスタ』に所属するレーフル・ファウルス・ネレイド少佐の戦闘機中隊が戦場に投入されたのもこの時である。無論、レーフル・ファウルスの中隊だけではなく、連邦空軍は残存する艦載機と近接格闘戦闘用の艦艇のほとんどをこの戦場に投入している。

外板を擦過する中性子ビームの火箭を回避しざまに、Vリミッタ解除。慣性中和機構が悲鳴を上げるほどの急激な旋回。捕捉した目標に向かつて、火器管制装置が電磁ファランクスを自動発砲。数百発の劣化ウラニウム砲弾に包み込まれたル・ラント艦載機が一瞬に爆散する。

右下方へ急旋回、回避。慌てて爆散圏からの離脱を図る敵機に、中性子ビーム砲を短くパルス状に叩き込む。二射で一機。更に三射で二機が砕け散る。投入された艦載機の総数は二万五〇〇〇、格闘戦闘用の艦艇は五〇〇隻以上に達したが、外からなだれ込むマールク艦隊は勢いに勝り、将兵の疲労度もやや低い。

巨星ミットリツフェルの噴き上げる巨大フレアのためにほとんど用をなさない通信システムを介して、我に倍する敵機に包囲されたレーフル・ファウルスの僚機の上げる苦鳴が短く伝わり、そして一瞬で消える。

戦場に巨大な閃光が走った。

「……！」
「シグナ・フォース」号被弾……総員、退去！ カーツ司令長官、ネレイド参謀長はともに戦死のしよう……」

愕然としてレーフルは振り返る。第二艦隊の後方、連邦空軍艦隊の主力をなす第二艦隊の中枢部に、超新星が現出したような巨大な閃光が閃き、波打つように脈動しながら八方に拡散しつつあった。

「戦死……だと？」

『シグナ・フォース』は連邦空軍艦隊の総旗艦、その撃沈は、そのまま連邦空軍全艦隊の『戦線崩壊と全面的な潰走』を意味する。

そして、その通りだった。

連邦空軍の艦列に浸透したマールク艦隊は、旗艦を失って指揮系統に混乱を起こした連邦空軍の艦艇を零距離射撃に引きずり込み、次々に撃破していった。

「こちら第一〇艦隊旗艦『クラークン』……カーツ司令長官が戦死され、以後の指揮権は第一〇艦隊司令官ヒューレル中将に委譲された。私の指揮に従い、ともに戦え。連邦空軍はまだ敗れてはいない」

「ヒューレル……あの殺戮提督が？」

覚えず、レーフル・ファウルの唇から低い罵声がこぼれ落ちる。

「ヒューレルで勝てるものか……このままじゃ、負けてしまつどころじゃない、全滅じゃないか！ 戦死？ カーツ提督とネレイド参謀長が？ そんな馬鹿な……」

「このままでは全滅を待つばかりだ……」

同じ言葉は、数千キロを隔てた戦艦『リュイビル』の艦橋でも交わされていた。

「敵艦隊は第八艦隊を壊滅させ、第三艦隊にも大打撃を与えた。第三艦隊の抵抗は、もつあと幾らも続かない」

「しかし、大佐……我が第三二八戦隊の戦力は二〇〇隻を割り込んでおります……この戦力では……」

「味方が苦しい時は、同じように敵も苦しい。マールク艦隊は既にまる二日以上以上の攻勢を続け、補給路は伸びきっている。敵の先鋒を叩き、

攻勢を一時的にでも挫折させたならば、マールク元帥といえども、それ以上の攻勢を継続できるとは思えん。問題は、タイミングだ……で、リン大佐との連絡は取れたのか？」

「は、何とか……リン大佐の第八四四戦隊は辛うじて戦力の再編に成功。残存兵力は戦艦四四隻、重巡九二隻の二三六隻。なお一撃分の余力あり、との連絡が入っております」

「宜しい」

領き、ハイドリヒ・ネーベルシュタット大佐は、幕僚達の表情に視線を走らせる。いずれも血の気を失って久しい部下達の表情に、鋼青色の目をわずかに皮肉っぽい形に歪めた。

「わずか四〇〇隻そこそこでは全体の戦局を動かすことはかなうまい……しかし、上手く用いれば四〇〇隻といえども二〇〇〇隻、時には二万隻の大艦隊に匹敵する働きをさせることもできる。旗艦が破壊され、指揮系統を破壊されてしまっている現在、一時的にでもマールク艦隊の鋭鋒を逸らせ、その隙に戦場から逃げ出す。前線指揮官に与えられた選択肢としてはこれがベストだ」

「大佐……」

「うん？」

「ヒューレル中将閣下からの通信ですが……」

「何と言ってきた？」

「カーツ司令長官から指揮権を委譲された。以後、我が指揮に従え……と」

「はん！ 殺戮提督が……」

ネーベルシュタットの口調は、内容とは裏腹に平板を極める。

「何様のつもりか知らないが、あの男では全面の挽回はかなうまいよ。構わない、受信しなかったことにしておけ。責任は私がとる」

「は……大佐、もう一つ、奇妙な通信が入っているのですが」

わずかに眉を動かし、情報参謀を促す。めったに表情を動かさない

てくるメル・ヤンデキファイティ艦隊の正面を迎撃し、側面をフェリー・ペイク中将の機動兵力で叩いて撃退しようと試みたが、高速で突出してきたベイ・ドレソンの艦隊がそのペイク艦隊の前面に立ちふさがってヒューレルの意図を挫折させた。ばかりでなく、前進を食い止められたペイク艦隊の長くのびた側面に、マールクの直率する第一艦隊が襲いかかり、高密度の砲火を注ぎ込んで艦列に十数箇所の破孔を開いた。重なり合うようにマックス艦隊が突入し、穿たれた破孔は、見る見る亀裂を広げ、互いに連なりあつてペイク艦隊を縦に引き裂いてしまったのである。

「何と言つことだ……レーゲル！」

旗艦『クラークン』の艦橋で、ヒューレルは指揮シートを蹴りつけるように身体を起こした。

ヒューレルにしてみれば冗談ではなかった。アレクタの第九艦隊に続いてペイクの第七艦隊までが崩壊すれば、既に二〇〇隻前後でしかないまでに戦力を失っている彼の艦隊は、マールク艦隊の注ぎ込む破壊力の怒涛のなかで泡のように消え去ってしまったのではないのだ。

が、ネーベルシュタットが評したように、用兵家としてのヒューレルは卑怯でもなければ、臆病でもなかった。

「レーゲル、直ちに全通信路を開き、伝達せよ。『クラークン』号に随伴し得る艦艇、艦載機はすべて『クラークン』号に従え、とな」

「脱出なさるのですな？」

「したり顔に応じたデリク・レーゲル少将の聴覚を、痛烈な面罵が正面から直撃した。

「愚か者が！この局面で指揮官が逃げ出したらどうなるか、その程度のことも読めぬのか」

「し、しかし……」

「さつさと通信路を確保せよ。何を待っている？ 昇進か？ この戦場から生きて出られなかったら、貴様、これまでに稼ぎ貯めた分も使

えはせんのだ。さつさと行け、行かんかあっ！」

尻を蹴飛ばされたように駆け出していく参謀長の背に、ヒューレルは氷点下の視線を突き刺す。

「クズが！」

大容量を誇る『クラークン』号の全通信メディアを介してヒューレルが掌握し得た直率部隊は一五〇〇隻。その直率部隊を率いて、ヒューレルはマックス艦隊の真正面に突撃した。

そして、それがネーベルシュタット達の待ち受けていた好機でもあった。

「シー・ファン、動いたぞ！」

「了解した」

必要最小限度の通信が交換され、二人の大佐に率いられた四〇〇隻の艦隊が、沸き返る戦場を僅かに迂回しつつヒューレル艦隊の側面に回り込む。

同時に、少し離れた宙域で第三艦隊の一角を守っていた部隊の指揮を執る戦艦『ヴァルヴァーラ』の艦橋で、指揮官が右手を挙げて艦長のミュレイス中佐に合図する。

「大佐？」

「ネーベルシュタットとリンが動いた。連絡通りだ」

「では？」

「麾下の全艦に告げよ。我に続け」

「了解しました」

ミュレイス中佐が命令を伝達する。『ヴァルヴァーラ』周辺を固める百数十隻の連邦空軍艦艇が、熟練した動きを見せて旗艦に随伴する。部下が自身に寄せる絶対の忠誠を示すその動きを追う灰緑色の瞳は、

「殺戮提督は信じるに値しないが……」

呟く声は低かったが流麗なアルトの響きを帯びて微かに聴覚を刺激

した。

「……！」

それよりも早くネーベルシュタット達の動きに気づいたのはレーフル・ファウルスだった。気づくより早く、通信システムの出力を全開にし、“我に続け”と叫ぶなり機首を転じる。彼に従った機数は決して多くはなかったが、それでも一〇〇機あまりを数えたのである。

超高速でマックス艦隊の全面に躍りてたヒューレル艦隊は、密度の高い砲撃でマックスの鋭鋒を巧みにそらしながら、ペイクに艦隊再編の時間を与えた。畏を悟って反転するマックス艦隊の上方から、今度はネーベルシュタット大佐以下の五〇〇隻あまりと数百の艦載機が光の滝となってなだれ落ちてきた。

「敵機至近！」

「上方陽子砲列、全門斉射！」

「宙雷、急速接近、弾幕密度上げろ！」

マックスの旗艦『ラングード』で怒号と叫喚が交錯し、着弾の轟音が一切を漂白する。

文字どおりに駆け違うようにネーベルシュタットの艦隊が螺旋状に突き抜けたあと、艦隊をまとめ終えたペイクが襲いかかる。短時間、しかし、猛烈な短距離砲撃が応酬された。荒れ狂うような砲撃戦の最中に、マックスの旗艦『ラングード』が更に四発の宙雷の直撃を受け、主砲塔の半数が沈黙した。続いて、反転して天底方向からつつこんできた艦載機の群の内の数機が至近距離に迫りざまに対艦ミサイルを叩き込んだ。

金属的な叫喚が連続して『ラングート』の巨体を揺るがせ、舷側陽子砲列のエネルギー伝導路に沿って発生した爆発が通信システムの一部を損壊させ、戦闘艦橋にも小規模な爆発を引き起こした。

「うおっ！」

指揮シートから立ち上がったマックスは、凄まじい激震に脚を

掬われて転倒する。マックスの長身が宙を舞い、フロアに叩きつけられて動かなくなった。

「閣下！」

悲鳴に似たつめき声を上げるマックスの幕僚達の顔を、再び激烈な閃光が漂白した。速度を緩めぬままに突入してきたヒューレルの直率部隊がほとんど零距离射撃で荒れ狂う。

ネーベルシュタットの狙いは的中し、マックスの負傷の報を受けたマルク元帥は、麾下の艦隊をまとめて戦場からの離脱を始め、これにタイミングを合わせるように、生き残った連邦空軍の艦艇も三々五々、戦場からの脱出を開始したのである。

「艦長！」

戦場からの脱出を図る第七艦隊の航空母艦『オイディプス』の艦橋で、航空参謀が声を張り上げる。

「第二艦隊のファイター・コマンドが着艦許可を求めています！」

「降ろさせてやれ！」

『オイディプス』の艦長はためらわなかった。

「一機でも多く救ってやれ。所属艦隊など問題にしている場合ではないぞ！」

間もなくランディング・デッキに滑り込んできた艦載機の群に、『オイディプス』の搭乗員達は息を呑む。ある機体は光の剣で切り裂かれて全身をささくれ立たせ、ある機体は至近距離で炸裂したミサイルの破片をそこに突き立たせてハリネズミのような姿を曝し、また別の機体は着艦の際の減速に耐えきれずに機体を分離させ、コックピット部が轟音を立てながらランディング・デッキ上をつんのめり、辛うじて緩衝用の減速フィールドに受けとめられて停止する。

『オイディプス』のランディング・デッキで救助を求める悲鳴と、指示を与えるための怒号が交錯し、血塗れでコックピットから引き出されたパイロットが自走担架に乗せられて運び降ろされる。待ちかね

たように次の一機が着艦したとたんに降着脚を折り、まるで力尽きたかのように崩れおれる。

その中で『オイディプス』のランディング・デッキ・クルーが目を見張ったのが、最後に着艦した一機だけがほとんど無傷の姿をしめしていたことだった。

「何機、降りられた？」

「コクピットから降り立った長身のパイロットが最初に放った問いがそれだった。

「二八機。無傷は、貴官のを合わせても五機というところだろう。八人は降りたときには死んでいた。まだ三人はかり危ない」

「わたしの部下たちだ……」

「分かっている。貴官の部下であるだけでなく、連邦空軍にとってかけがえないパイロット達だ」

デッキ・クルーはちょっと背伸びをして、長身のパイロットの肩を叩く。

「救けられる限りは救ける。最善を尽くす、約束するぞ」

「感謝する」

パイロットがヘルメットを取るのを、デッキ・クルーは感嘆の表情を浮かべて見守る。無骨なヘルメットの中から現れたものは、たしかに鑑賞に値するものだった。

が、自身に向けられる感嘆の眼差しにはまるで注意を払わない。その年若いパイロットは、惨憺たる有り様のランディング・デッキに無然とした視線を投げつけた。ブラック・グリーンBlack Greenの双眸が、何かしら禍々しい金色の焰を帯びて煌めいたようだった。

形のいい唇が微かに動くのを、何人かのクルーが目にしたが、言葉が空気の波動として彼らの聴覚を拍つには至らなかった。

『「銀河系大戦」を通じての最高の名將は、ル・ラント共和国のク

ローネス・マールク元帥とするのが定説となっている……』

「銀河系大戦」時代のメルティア・スルフェイク侯爵……ラルク・トヒユナ……は優れた歴史家として知られるが、「銀河系大戦」の軍事を、その冷徹な目で批評したのはラルクにとっては次代のスルフェイク侯爵である。

『戦術・戦略・政略にわたる広範な視野、及び戦場における智と勇のバランスにおいて、マールク元帥は傑出した存在であった。マールク元帥の好敵手として知られたレーフラム・トゥリユー・ネレイド提督は、政略における視野においてマールク元帥に一步を譲ったと言わざるを得ない。マールク元帥にとっての最高の補佐役であったネイス・ミュッケル元帥は、戦略における視野においてマールク元帥のよき後継者であつて、決してマールク元帥にとっての先駆者ではあり得なかつた。』

唯一、あらゆる分野においてマールク元帥に匹敵し、最もマールク元帥を苦しめるに至つたのが、レーフラム・ネレイド提督の弟のレーフル・ファウルス・ネレイド提督であつた。彼は、優れた戦術家であり、戦略家として最高の存在であり、かつ傑出した政治家としての資質に恵まれていた。

にもかかわらず、レーフル・ファウルス・ネレイドは、必ずしも後世の市民の共感と支持を得られないのが現実である。レーフル・ファウルス・ネレイドは、後世の共感を呼ぶには余りにも冷徹な存在であつた。連邦市民は、政戦両略の巨人であるレーフル・ファウルスよりも、あくまで戦争の冷酷さと、父と弟の指向した覇者への道を拒み抜いたレーフラム・トゥリユーに多くの共感を抱くのである。』

もつとも……

至近の未来においてシエルメス連邦とル・ラント共和国の歴史を左右するに至る若者は、この少し前まで、およそ戦争とは最遠の距離にいた。

レーフル・ファウルス・ネレイドは、連邦母星コーネット・ティルシニア州都ティルシニア市の中心に程近い高級レストランのテーブルで、ル・ラント第四艦隊の“ブラック・ホーク”部隊よりもなお手強い相手と向かい合っていたのである。

「叔母さまのことはご存じないの？」

華奢な手に支えたワイン・グラスにクリスタルの輝きをきらめかせながら、自身が水晶の人形のような少女は、容貌にふさわしい透き通った声を投げかける。その声に幾分か詰問の響きがある。

「知らないな。こちらで戦つのに必死でね、メイリア姫の安危を問いつ合わせるどころではなかった」

形のいい眉を僅かにしかめながら、レーフル・ファウルスは、やはりクリスタル・ガラス越しに少女の視線を受けとめる。

「六シエルクメス・ヤードを超えるはずの長身、まだ少年期のしなやかさを多分に残しているとはいえ、鞭のような肢体は鍛えぬかれた鋼鉄の強靱さを秘めていた。

名匠が、『鋭気』をテーマとして丹精を込めて彫塑すればこうもなるつかと思われる彫りの深い美貌は、決してこの場にふさわしくないものではなかった。明るい、華やかな内装のなかでレーフル・ファウルスの姿をやや浮き上がらせているのは、むしろ、その雰囲気だ……と、優れた観察眼の所有者なら見抜くだろう。端正さを極めたようなその全身からは、しかし、他人をひやりとさせるような禍々しい雰囲気気が漂い立つような……」

だから、彼の連れが一層目を惹くことになる。

「二、三歳くらい。その年頃にしてはかなりの長身。水晶色のロング・ヘアを銀色のベルベットのリボンでポニー・テールにまとめた愛らしい少女。レーフル・ファウルスのような驚くほどに整った美貌でこそないが、立ち居振る舞いはレーフルよりも優雅ですらあり、むしろ彼女の方がレーフルよりも人目を惹くかもしれない。」

「どうして戦つたの？」

少女は納得しない。半ば以上中身のなくなったワイン・グラスを音もさせずにテーブルの上の定位置に戻すと、小さなおとがいに人差し指を当ててレーフル・ファウルスを見上げた。ややあつて、結論を無造作にテーブルの上に放り投げる。

「だから嫌い、軍人なんて。敵でも味方でも、人を殺せたら満足なんだから」

レーフルは彼らしくもなく、というより、この少女と向き合った時だけ見せる困惑の視線をキヤンドルごしにテーブルの向かい側に投げる。鋼鉄の槍のように勁烈な彼の視線を知る者なら、この若者ですら困惑することがあるのかと驚嘆を新たにするだろう。

『オイディプス』号を降りたつて最初に彼が訪ねたのは、ティルシニアの全寮制高等学校。ホーム・ルームからの帰宅途中だった少女、ファーリア・トヒユナを夕食に誘ったのだが、前回同様、ファーリアはレーフルラムの意表を衝いてきた。

「ええと……どなただったかしら？」

あどけない微笑を浮かべながら、彼女は淡い色の瞳を瞞って見せたのだ。

「この間、ワインをご馳走すると約束したはずだけだね」

「そんな約束してくれる人、いっぱいいるもの、いちいち覚えてたら頭がパンクしちゃうわ」

冗談なのか本気なのか、レーフルにはまだこの少女の表情が読めない。淡いスカイ・ブルーの眸をくるくると踊らせる表情は無邪気そのものなのだが。

「五〇六年物の白だ、としても思い出してくれないかな。それともまたチヨコ・パフェがいい？」

瞬間、スカイ・ブルーの眸が蒼氷色のきらめきを孕んだように見えたのは、レーフルの錯覚だっただろうか。

しかし、錯覚でなかったとしても、きらめきは一秒の何分の一かで消え去り、もとの無邪気な笑顔が取って代った。

「あ、覚えてるわ。レーフラム・ネレイド中尉さん、でしょう？」

「それは兄の名前だよ」

少しくうんざりした口調で、少女の記憶に修正を加える。

「レーフル・ファウルス・ネレイド。ついにながら大尉なんだが……」

「軍人さんだつたら同じよ、中尉でも大尉でも」

ファアリアは議論の余地のない明快さで抗議を封じ、レーフルを絶句させる。

「嬉しいな、ほんとに？ せつかくだからこ馳走になっちゃおうかな。お父様つたら、マーシャは子供だからお酒はいけないっていつもおっしゃるの。それでいて、パーティなんかでは、わたしもワインを飲まされるのよ、マーシャネス・オブ・スルフェイクとしてのギムだつて……それだつたらぶだんから飲んでたつていいと思わない？」

そうね、ドミートウリイの食事もいいけど、たまには外にも行きたいな。ね、友達が一緒でもいい？」

「わかった」

辟易してファアリアの饒舌を遮る。

「友達というのはメルシャのことか？」

ファアリアに懐いている、寄宿舎の飼猫の名を、レーフル・ファウルスは記憶の底から拾い上げた。

「メルシャも連れてっていいの？」

「可能なら人間の友達に限って欲しいな」

「じゃ、メルシャにはお土産ね」

「わかった……しかし、お守り役に断らなくてもいいのかな。メルティアのスルフェイク侯爵令嬢ともあるつもの、そんなに気軽に……」

ファアリアはあっさりとの言葉を封じた。
「言ったら止められるもの」

老ウエイターが眉をひそめているのも知らぬふりで、ファアリアはワイン・グラスを口に運ぶ。五〇六年物の白ワインは、専ら彼女のグラスに注がれてばかりいるようだった。彼女の前にワイン・グラスを運ぶように命じるレーフルを、レストランの老ウエイターは、さすがに奇妙なものを見る目で見つめたものである。無論、レーフル・ファウルス・ネレイド……レイフレム・ナイザル・ネレイドの次男としての名前と、それなりの額のチップが老ウエイターの異議を封じた形になっている。

帰還を祝う連邦空軍艦隊将兵でテーブルはほぼ満席状態だった。レーフルが隅のテーブルに案内されていくと、周囲から好奇の視線を招き寄せた。彼一人だけでも十分に周囲の注意を惹く美貌の青年が、まだ幼いとは言え人目をそばだてるに十分なほどに美しい少女を連れているのだから、戦場帰りの殺伐さを納めきれない艦隊将兵達の、悪い意味での注視を集めるのはやむを得ない。

こちらでよろしければ、と案内されたテーブルのとなりでテーブルを占めていた三人の士官達が、非好意的な視線でレーフルを迎える。すでに、彼らのテーブルの上には空になったワインボトルが何本も並んでいた。

「あれは、レーフラム・ネレイド中将じゃないのかな。生きていたのか」

さらにテーブルをいくつか隔てた位置にいた一人の士官も好奇の、ただし、こちらは好意的な視線を食後のコーヒー・カップから転じた。その穏和な知性を感じさせる顔から、黒い髪がやや撤退を始めている。

「似ているが、違う」

相席の士官が、紅茶に注いだフランデーの湯気を顎に当てる。筋肉質の堂々たる長身。短く刈り込んだ銀色に近い金髪。灰色味の強いステイル・ブルーの瞳の意志的な表情の軍人である。

「たぶん、弟の方だろう」

「レーフル・ファウルス・ネレイド？」

「ああ。第二艦隊の『デラスタ』のファイター・パイロット。『第二艦隊の撃墜王』……」

「あの銀色の女の子は？ どこかで見たような気がしたが……」

「美人だな……というか、美人になることが約束されているような子供だ……これは面白いな、シー・ファン。私も、あの娘に見覚えがある。誰だかは忘れたが……なるほど、『銀色の女の子』か。貴官にも多少は詩人としての資質が隠れていたらしいな」

「形容は妥当だ、とつけ加える。ただし、銀色よりももう少し透明度の高いスポットライトが、その少女の回りを彩っているような印象がある。『水晶人形』とは、実際にファリアのニックネームである。」

「確か……スルフェイク侯爵令嬢。ファリア・トヒユナ。『第二次メルティア紛争』後にこっちへ留学……まあ、体のいい人質だ」

「ふむ……」

「それとハイドリヒ、隣の連中だけだね……」

「第一〇艦隊のくずどもか……」

「ハイドリヒと呼ばれた士官の口調が急激に苦さを増す。」

「『殺戮提督』が艦隊最高司令長官とはな。部下を見れば、上官の質もわかるというものだが……」

「さて、どうするかね、ハイドリヒ。あの連中はいずれ、ネレイド大尉に絡むと思っつが……」

「やや楽しげな口調。学者を思わせる穏やかな容貌を、好戦的に閃いている黒い目が裏切っていた。」

「貴官はコーヒーの方がいいか？」

「ああ、もちろんだよ……レーフル・ネレイドだけだね、ハイドリヒ」

「ん？」

「レーフラム・ネレイドとは違う風を吹かせることのできる男かな？ 確か一九歳だったはずだ。一九歳で大尉。レーフル・ネレイドの歩みはレーフラム・ネレイドに劣るものではない」

「そうかも知れないし、そうでないかも知れない。レーフラム・ネレイドは一九歳の時、既に『シュネーゼル事変』で戦略家としての実績を示していた」

「機会が与えられていない」

「確かに。与えられたとして、果たして銀色の竜の弟はやはり銀の狼であり得るかな？」

「髪の後退した士官は、わずかに肩をすくめる。コーヒーをすすり、視線を転じる。」

「うん……始まったよ、ハイドリヒ」

「プライム・リップ・ステーキをメインにしたごく標準的なフル・コース。このレストランでの名物メニュー。しかし、ワゴンに載せられたままの丸ごとの肉の塊から切り分けられるステーキは、レーフルの記憶が告げるところによるとわずかに味が落ちていた。」

「申し訳ありません。パストラル・コーラルからの移入が止まっておりますので」

「恐縮する老ウェイターに、レーフルはかぶりを振ってみせた。下らぬことを口にしたという自責がある。」

「レーフルが、兄レーフラムとわずかに異なる点があるとすれば、物質的な面に対する関心のわずかな強さ。兄であれば、高級レストランの最高級メニューだろうが、戦場での非常食糧であろうが、その味の巧拙などを批評するまい。そう考えることは、レーフルにわずかに忸怩たる思いを抱かせる。」

「あなたの責任ではないな。コーラルの叛乱を抑えきれなかった、我々連邦空軍軍人の責任だ。恥じることはない」

「随分な言いようでないか。レイディ・キラーの大尉殿」

野卑な響きを帯びた声。レーフルは静かに身体を回転させる。隣のテーブルの上にワイン・ボトルを林立させていた三人の士官。いずれも大尉から中佐クラスと見える彼らを、ウェイターたちもあからさまに忌避しているようだった。

ファアリアがちょっと傾わしげに、レーフルと士官たちに視線を走らせる。上背ではレーフルにはるかに及ばないが、いずれもふたまわりばかり幅のある身体つき。中佐肩章が、レーフルとテーブルをともにしているファアリアの姿をねちっこい視線でねめ回す。アルコールで赤く濁った視線が、最後にファアリアのすなりとした姿に固定する。ファアリアは唇を少し歪める。嫌悪はあつたが、恐怖はまったくない。

「あなたたちは？」

「我々も“ミットリツフェル”生き残りの勇者たちだ」

「どの艦隊です？」

「第一〇艦隊だ」

「なるほど、“殺戮提督”の部下でいらつしやるわけだ」

「口をつつしめ、大尉。ヒューレル閣下は現在、連邦空軍艦隊最高司令長官閣下であられるぞ」

「申し訳ないが、食事中です。話があるのなら後にして頂きたいのですが」

「では、謝罪しろ」

「謝罪？」

レーフルは眉を跳ね上げる。

「何に対して？」

「連邦空軍への侮辱に対してだ」

「連邦空軍を侮辱した覚えはないが……」

「今、侮辱した」

「どのよつに？」

「コーラルの叛乱を抑えきれなかったのは連邦空軍の責任だといったはずだ」

「言いました」

「コーラル鎮圧の責任は我が第一〇艦隊のものだった。すなわち、貴官の言は、我が第一〇艦隊を侮辱したに等しい」

「屁理屈ですね」

跳ね上げていた銀色の眉を、レーフルは静かに無表情に戻す。視線をファアリアに走らせる。“水晶人形”は、知らぬ顔でワイン・グラスを揺らめかしている。キャンドルの光が深紅のワインを透かし、狙撃された艦載機が爆散していく血の色の閃光の煌めきをレーフルに思い出させた。

「屁理屈だと、聞き捨てならないな、大尉」

三人が一斉に椅子を蹴る様子。周囲の士官達がさすがに非難の声をあげるのを無視する。

「もう一度機会をくれてやる。謝罪しろ」

「お断わりする」

「レイディのままで格好をつけたいんだろうが、後悔することになるぞ」

レーフル・ファウルスも席を立つ。ブラック・グリーン の瞳が細められ、照明を弾いて炬火のような金色の光を帯び始めているのに、士官達はわずかにたじろいだようにあどしやる。

中佐肩章の士官がファアリアの腕を取ろうと一歩を踏みだし、唐突に悲鳴を上げた。ファアリアが狙いましたようにグラスのワインを彼の両目に浴びせかけたのだ。両目をアルコールで塞がれ、二歩、三歩と後退した中佐肩章は、何者かに両腕を掴まれて喚き声を上げる。

「何だ、貴様は。俺は第一〇艦隊艦隊司令部の作戦参謀……」

「それ以上、肩書きを口にするとは後悔することになるぞ、中佐」

「な？」

「俺の艦隊は崩壊状態だから肩書きらしいものを紹介できないのだが……ハイドリヒ・ネーベルシュタット大佐だ」

「ネーベルシュタット大佐？」

「さよう。ここはレストランだ。レストランとは喧嘩をする場所にあらず、食事を楽しむ場所だ。これ以上、他人が食事を楽しむのを邪魔してほしくない。出ていき給え。それとも、自分の足を使うのはいやかね？」

「……こ、こんなことをしてただですむと思っっているのか。おれは第一〇艦隊の……」

「警告はしたはずだぞ、中佐。わたしを恨むな」

鈍い発射音。中佐肩章の士官と、その取り巻きの二人の士官が同時にフロアに崩れ折れる。ファアリアが小さく悲鳴を上げてレーフルの腕にしがみつく。

「ああ、失礼しました。お嬢さん。殺したわけではありません。どうも、最近はこの手合いが多くなって困りますので。特に第一〇艦隊の横暴には手を焼いております」

ネーベルシュタットの手に麻痺銃を見だして、ようやくファアリアは硬直を解く。

「ネーベルシュタット大佐ですか。ミットリッフェルでのことは聞いています。わたしが帰還できたのも、あなたの部隊の奮戦と援護があつてのことです」

「光栄です」

ネーベルシュタットの口調は、大佐が大尉に向かって使うそれではなかった。レーフルの視線は、穏やかな表情の黒い髪の士官にも向けられた。既にその瞳からは危険な炬火の閃きは消え去っている。

「リン・シー・ファン大佐？ アレンタ艦隊の？」

黒髪の士官……リン・シー・ファン大佐は苦笑した。

「わたしの部隊だけですがね、生き残ったのは……さて、邪魔者は憲

兵に引き渡すことにします。連中も給料をもらっているんだから、こつううときぐらいいは働いてもらうことにしましょう……では、大尉、よい夜を」

「ネーベルシュタット大佐、リン大佐……」

立ち去りかけた二人に、レーフルは思わず声をかけている。

ゆっくりと振り返り、ネーベルシュタットはちょっと面白そうな表情で、プラチナブロードの美しい若者を視界に入れた。

「何か？」

「つまり……」

レーフル・ファウルスは言葉につまる。彼らは二人ともミットリッフェルの最悪の戦場から、とにかく最大数の艦艇と兵力を脱出させている。しかも三〇代にさしかかったばかり。レーフルは、自ら艦隊を動かし得る地位に就いたときの幕僚リストを既に作り上げており、ネーベルシュタットとリンはそのリストの最上位を占めていたのだ。

しかし、この時ばかりは口にするべき適当な言葉を思いつかず、レーフルは二度、三度、口を開きかけて諦めなければならなかった。

「つまり……感謝します」

「お役に立てて幸いですよ、レーフル・ネレイド大尉」

どう思っ、あの少年を……ティルニアの官舎に向かう道すがら、ネーベルシュタットが僚友を顧みる。

「さて……最後に何か言いたそうだったね。それで、口にし切れなかった……」

「さてな……」

ネーベルシュタットは微笑つ。彼はレーフルの兄レーフラムの戦争への嫌悪を知っている。それがもっともなことだとも思う。しかし、同時にレーフラムへの批判も抱いているのだ。ル・ヨントとは開戦してしまつた。そして、連邦圏は四分五裂しつつある。一つの国家が分裂しているとき、最大の不幸を味わうことになるのが市民たちではな

いのか。戦争は無残だが、無残なるがゆえに戦争を忌避していたのでは、ますます戦禍は惨烈なものとして市民を巻き込んでいくのではないだろうか。戦争をデザインできるのはほんの一握りの人間にすぎない。戦争の大部分では、真に戦争を構想できる人間が必要なきにその地位にあったことはまれである。それがゆえに、多くの戦争がますます鮮烈な深紅のヒロードで歴史を埋め尽くす。

「戦争は無残だが……戦争をしてまで守り通せるものがないというのも、やはり無残なことなだろうか、シー・ファン？」

ネーベルシュタットは回答を得られなかった。穏やかな表情を保ったまま、リン・シー・ファンは応えたのである。

「さて……ハイドリヒ、ここで設問させて欲しいのだがね」

「ああ？」

「要するに連邦圏は戦乱状態に陥った。この状況で貴官はどついう選択を採るか、なんだが……」

「我々は連邦空軍の軍人だ。である以上、連邦空軍の指揮に従う」

「“殺戮提督”のもとで、か？」

「いや……」

ネーベルシュタットは微笑い、リンの設問へのそれ以上の回答を省略した。

偶然なのか、そうでないのか、寄宿舎でファアリアと部屋を共有している二人の友人の父親とレーフルは第二艦隊での僚友だった。アヤ・フランナの父リユイス・フランナ中佐は、重巡洋艦『トゥリニエール』を指揮しており、この年……連邦暦五七二年……初めの“第二次ターミアア辺境宙域会戦”で艦と運命を共にしている。

もう一人のアイリーン・ウィレムの父ロン・ウィレム大尉は重巡洋艦『フリスチア』副長を勤めていた。『フリスチア』が“ミットリツフェル宙域の会戦”に参加していたことは確かだが、二万隻以上が失

われ、三〇〇万以上の死傷者を算したあの大会戦を生き延びたか、否かまではレーフルの知るところではない。

「大尉さん……」

ファアリアは、レーフルをそう呼ぶ。いつの間にか彼女の前にはデザートの大シャベットが並び、その横に完全に空になった白ワインのボトルが大きな顔で佇立していた。レーフルは、ちょっと呆気に取られた表情で、まだ半分近くも中身を残している自分のワイン・グラスに視線を落とした。

「……？」

「どうして他の人は帰ってこないの。戦争は終わったって聞いたのに、アイリーンのお父さんも帰ってこないのよ。どうして？ アイリーンね、とつても心配してる……」

「悪いが知らない」

欠々のアルコールに思考が僅かながら千鳥足になるのを感じながら、答える。兄に似て、レーフルの酒量は決して多くない。

「自分一人帰ってくるのが精一杯の戦いだった。悪いが他の艦隊がどうなったかまでは気が回らなかった。“ミットリツフェル”だけじゃない。今年初めからの会戦は、どれも、連邦空軍にとって不利な戦いばかりだった。『トゥリニエール』がやられたときも、艦隊が脱出できたのが不思議なくらいの戦いだった。」

ミットリツフェルで戦った後、どうやって戦場を離脱したのかも覚えていない。それぐらいの混戦だった。生き延びた艦はローゼンバッハに帰ってきている。ウィレム大尉も生きていれば、そのうちに連絡をよこすはずだ

「ふうん……？」

ファアリアの碧眼は、驚く程強い光を湛えたとレーフルを正面から見据えて来る。嘘やごまかしを許さない目は、レーフルに兄のそれを思い出させた。

ややあつてファアリアは、瞳に浮かんだ強すぎる光を瞬きでかき消した。

「ごめんなさい、大尉さん。失礼なことばかり言つて……」

「ごちそうさま、と軽く頭を下げて少女は軽やかな身のこなしで席を立つ。レストランの抑えた照明の中、ポニー・テールにした水晶体の髪が鳥の羽毛のように彼女の動きの優雅なまでの軌跡を描いて見せる。いつ口にしたのか、シャーベットも綺麗に空になつていた。

「あれ、デイスコつて言つんでしょ？」

不意にファアリアが言つ。

レーザー・サインの二際鮮やかな一画。連邦の古都と呼ばれ、閑静さで知られるティルシニアも、ただ閑静なだけではないという証左が、シティの中心部に展開していた。

「うん？」

「大尉さんは行かないの？」

「どこへ？」

「デイスコ」

けるり、と言つてのけるファアリアに、レーフル・ファウルスはまた一瞬、言葉を見失つ。

「スルフエイク侯爵令嬢ともあるう者が、夜中に町中のデイスコなんかへ繰り出すのか、でしょ？」

接ぎかけた言葉を、またファアリアにさらわれてしまつ。スカイ・ブルーの瞳が、華やかなレーザー・サインの光を弾いて悪戯っぽくくめいている。

レーフル・ファウルスは運転席で長身を身じろぎさせた。

「ああ」

「私は行かない……嫌いだもの。でも、メルティアでは……」

その後の言葉を、ファアリアは辛うじて喉元で飲み下した。口にすれば、鋭敏なレーフルは彼女の振る舞いの中に連邦空軍への強烈極ま

る反発が隠れていることに気づくだろう。剽悍な銀狼の尾を踏みつけるのは、余りに愚かというもの。

ファアリアは、この華麗な若者に反発と敵意だけを抱いていたのではない。しかし、後年、その聡明さを謳われることになる彼女も、自分の感情を十分に分析できるにはまだ幼過ぎたのだ。

「失礼します、レーフル・ネレイド空軍大尉、個人対個人通話が入っておりますが、お受けになりますか？」

ダッシュボードの“連邦空軍コンピュータ複合体”ターミナルが合音を流して、レーフルの注意を促し、二人の間に僅かに漂いかけていた気まずさをかき消した。

「誰からだ？」

「ヒュツペルと申されております」

「レンベルト・ヒュツペル……か？」

「さようです」

「用件と連絡先だけ話せと言え。顔など見たくない」

来たか、と思う。折れ碎ける寸前の連邦空軍を、連邦圏覇奪のための剣とせねばならぬ以上、ナイザル・ネレイドは彼を自陣営へ迎え入れることを望むだろう。銀河を舞台とし、兄レーフラムヤル・ヨントのマルク元帥と連邦圏、更に銀河の覇権を争うための第一ステップに足を載せる夢が、どうやらかなえられそつだ。

ただ、彼はヒュツペルが嫌いだった。父ナイザルの連邦空軍時代の高級副官。次代の艦隊司令長官の座が確実と言われたナイザルが、唐突に中将で軍を退くのに従つて軍を辞した。それまでネレイド家に忠実に仕えてくれていた執事のアルブレヒトを逐い、ナイザルの個人的な“腹心”と称し、連邦の権力システムの裏側で策謀する謀略家タイプの男を、レーフルは好まなかつた。

友人であるならいい、とも思う。友人で、かつ表だった地位のうえでも彼を補佐してくれるような人物。そういう人物を、“腹心”とし

て得られるのなら、それに越したことはないとも思うのだ。レーフルは、一九歳という自分の年齢と、年齢が招くかもしれない自分の限界も十分に心得ていた。自分なら、腹心たり得る人物にはナンバー・二の地位を与える。父のように、闇で使い、かつ顎で指図するような相手を“腹心”とは呼びたくないのだ。

ヒュッペルが伝えたナイザルからの条件も、特に意外ではなかった。いかにその兄が天才参謀と謳われていようと、実績も何もない一九歳の無名の大尉を、いきなり艦隊指揮の中枢に据える馬鹿はいない。

フリーリアが後部座席で体をびくりとさせるのには、無論レーフルは気づいていない。レーフルの全身に鋭気がみなぎり、あの禍々しい雰囲気を放ち始めるのを、フリーリアは敏感に捉えていたのだ。静かに眠っていた巨大な銀色の狼がゆっくりと起き上がり、炬火のような双眸をかつと見開くのを、その目でまじまじと見つめてしまったような戦慄に襲われ、彼女は恐怖の余りに全身を硬直させる以外の選択を見いだせなかった。

寄宿舎のエントランスでフリーリアを迎えたのは、僅かに銀灰色を帯びたふさふさした毛並みの若い猫。フリーリアを見て嬉しそうに「ミャウ……」と一声啼いたあと、レーフルの姿に気が付いたらしく、威嚇するように背中をまるめた。

「いいの、メルシャ。レーフル・ファウルス・ネレイド大尉さんよ。そんなに怖い顔しないの」

「その猫……」

「メルシャよ」

「そう、そのメルシャ……には、どうやら好かれていないようだ。教えて猫に、じゃない、メルシャ……か。メルシャに好かれようと思わない」

今夜は楽しかった……レーフルが差し出す右手を、ちよっとため

らってからフリーリアは握り返す。強張っていた頬を意識して緩め、第三者からみれば天使のように見えるに違いない微笑で表情を覆って見せた。

「お休みなさい、大尉さん」

「おやすみ。機会があったら、また五〇六年ものを「馳走するよ」

「ね、メルシャ……」

銀灰色の毛並みの猫に呼び掛ける少女の声は微かに震えていた。さっきまでは悪戯っぽくくるめいていた瞳も、何かしら怯えて固くなっていた。

「わたしね……あの人がとつても怖かったの」

白猫のオッド・アイが小首を傾げるようにして、彼女の怯えた瞳を覗き込んだ。ミャウ……と尋ねるような鳴声。

「わからない？ そつよね、メルシャには分からないよね……」

視線の先に、レーフル・ファウルス・ネレイドの長身が通りの彼方に消えようとしている。古都ティルシニアの夜。ドゥーミトリイ近くの通りには人通りが少ない。

「あの人のお兄さまのことを叔母さまは好きなの。どうしてかしら……わたしには、分からない……あの人は、なんか……人間じゃないような気がして……そつよ、メルシャ、あの人たちのお父さまのように……」

フリーリアは思い出していた。

メルティアが、まだ連邦の間接統治下にあった当時。そのメルティアの衛星軌道上に儲けられた会場でのパーティに、スルフエイク侯爵父娘は招待されたのだ。

「行かなくてはならないの、お父さま……」

「風邪だから、行けぬ、ということにしてもいいのだよ」

気の進まぬ様子のフリーリアに駆けるラルクの言葉は優しくかった。

ファアリアはかぶりを振る。

「行きます。また、お父さまがなにか言われたら嫌だもの」

会場は連邦空軍の戦艦

「お早いお着きですな、侯爵」

幅の広いがっしりした長身、ギリシア彫像のような彫りの深い容貌の男が歩み寄ってきた。美男子と叫びたい。しかし、何かしら人間離れした苛酷な性格が、その逞しい顎の線と険しい眉にはつきりと現われている。物怖じをしないファアリアでさえ、思わず父の背に隠れようとしたほどだった。歳の頃は五〇代の半ば過ぎに見えた。

「お久しぶりですね、ミスタ・ネレイド」

「そちらは侯の……?」

「娘のファアリアです」

「ほう……」

男、レイフレム・ナイザル・ネレイド上院議員はわざとらしく太い眉を跳ね上げる。暖か味や親しみの要素をまったく欠いた漆黒の瞳が舐めるようにファアリアの全身を眺め回す。気味の悪さと恐ろしさで、ファアリアは、この少女にしては滅多にないことだが、竦み上がった。

「これは、マーシャネス。レイフレム・ナイザル・ネレイドです。お初にお目にかかる。お見知りおき願いたい」

目が笑わない。

「……」

ラルクに肩を叩かれ、ファアリアは我に返って父の顔を見上げた。呼吸を整えてから、微笑を浮かべる。精一杯努力してのそれとは気づかせないほど愛らしい、無邪気な笑顔になった。

「怖かったの……とつても。あの人が同じ部屋の中かにいる、と思っただけで……だから分かったの、傍にこられただけで。あ、同じ人だって。あの人のお兄さまも、あんな人なのかしら……」

つぶやき、スカイ・ブルーの瞳をめぐらす。レーフル・ファウルスの姿は、既に彼女の視界から消えていた。レイフレム・ナイザルと対したときには、目を向けられないほどの巨大な悪意……正確には悪意

とは呼びがたい何かしらだったが……を正面から吹き付けられて竦み上がったファアリアだった。レーフルは、おそらくはまだ一九歳という年齢のゆえでもあろうが、やや柔らかな印象はあった。しかし、人としての本質はきわめて近いのだ。尤も、彼らの本質が、いわゆる悪と呼べるものなのかどうか、ファアリアは判断に窮している。一歳の少女の判断できる善悪の闘を、あの二人ははるかに超えていた。

無条件の好意を抱く気になれないことだけは確かだった。ファアリアの心臓にいつにもない急調子を強いたのは、レーフルの驚くほどに整った美貌ではなかった。

ファアリアは立ち上がり、仔猫を手招いた。

「いこ、メルシャ」

メルシャがしなやかな尻尾を緩やかにくねらし、ファアリアに従った。